

小学校社会科における思考力を育成する学習指導 ～思考ツールを活用した言語活動の充実を通して～

吉野 章子¹⁾・山口 陽弘²⁾・石川 克博²⁾

1) 高崎市教育センター

2) 群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

To Increase the Students' Ability to Reason in an Elementary School Social Studies Course: Focusing on the Language Activities Using Reasoning Tools

Akiko YOSHINO¹⁾, Akihiro YAMAGUCHI²⁾, Katsuhiko, ISHIKAWA²⁾

1) Takasaki City Education Center

2) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

キーワード：小学校社会科、思考ツール、言語活動、思考力

Keywords: an Elementary School Social Studies Course, Reasoning Tools, the Language Activities, Ability to Reason

(2017年8月31日受理)

1 小学校社会科における課題

第一著者の勤務校（H28年時点）の実態を平成27年度高崎市実施「標準学力調査（5年）」の結果から見ると、教科全体の正答率が、全国70.6%に対して68.9%と、-1.7%であった。活用力をみる問題では、全国54.3%に対し51.5%と、-2.8%であった。中でも、社会的事象の意味について、資料をもとに考察し、文章で表現する問題では、16%もの児童が無回答であった。このことは、勤務校の児童が情報をもとに考えること、考えたことを説明することに課題を抱えていることを示している。

本学級で4月に実施した単元末テストの記述問題では、やはり13%の児童が無回答であった。授業では、教師の問いに対して、単語で答える児童が多く、社会的事象について、用語や語句をつなげて説明できる児童は少ない。これらの実態から、伝え合い、考えを広げたり深めたりする学習（言語活動）を通して、知識

や情報を活用して考える力、さらには、考えたことを表現する力の育成が必要であると考えた。

2 思考力を育成する言語活動充実のための手立て

(1) 身に付けさせたい知識を明確にしたうえでの問題解決的な学習

問題解決的な学習においては、単元や本時の「学習のめあてと内容」を教師が具体的に設定することが重要である。児童の発言レベルまで具体化しておくことで、授業のゴールが明確になり、社会的見方の獲得につながる。また、児童の発言や1単位時間のまとめの記述を評価することも可能になる。

(2) 思考ツールの活用による言語活動の充実

本実践では、社会科の問題解決的な学習過程「つかむ」「調べる」「まとめる」のそれぞれの場面において、児童が収集した情報を再構成し、関係や傾向を明らかにするために思考ツールの活用を試みる。思考ツール

により、情報だけでなく児童同士の話し合いも可視化され、言語活動がより活発になり、課題の解決に向けて主体的・協同的な学びが実現できる。

①「型」をつかって考える【「つかむ」場面】. 関連付けて考えるための「型」を思考ツールとして活用する。「〇〇ということは、△△かな?」という「型」に当てはめて、社会的事象と関連づけて学習問題についての予想をしていく。毎単元の導入で繰り返すことで、資料を根拠として考え、表現する学び方を身につけることができる。また、予想をもとに学習計画を立てることで、その後の学習に見通しをもち、問題解決へ向けて主体的な取り組みが期待できる。

②「付箋」をつかって読み取る・伝え合う【「調べる」場面】. 付箋と、グループに一つの拡大資料を思考ツールとして活用する。ここでは、地図、統計等の基礎的資料を活用して調べる力をつけることを目的とする。本時の課題を解決するために、個人で読み取ったことを付箋に書く、グループで一つの資料に貼りながら情報を共有する、そして最後に自分で調べたこと、友達からの情報を総合して、個人でまとめる。グループのメンバーの情報を合わせることで、資料をより深く読み取ることができる。

③「キーワードカード&まとめるシート」をつかって説明する【「まとめる」場面】.

教科書単元末に設定されている言語活動（パフォーマンス課題）を単元の総まとめとして取り組む。その際、「キーワードカード（図1）」と「まとめるシート（図2）」を思考ツールとして活用し、説明する、文章でまとめる言語活動を行う。カードは、学習した用語や語句と教科書に掲載されている資料とを載せたものである。シートは、グループでの説明活動を通して児童

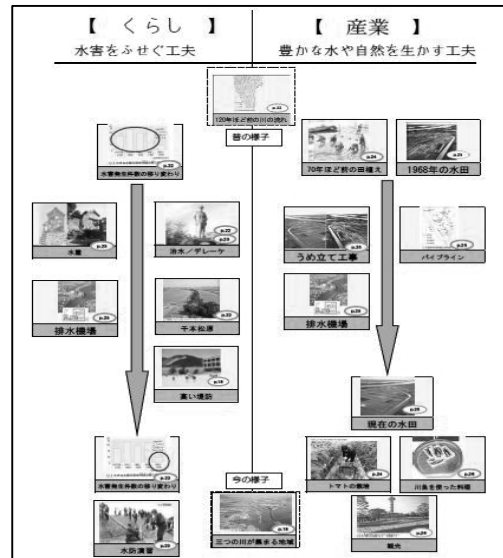


図2 まとめるシートの例（5月）

がカードを整理していく図や表、Yチャートなどの台紙である。カードには、その資料が掲載されているページを記載することで教科書を見直し、学習を振り返る学習方法を身に付けられるようにする。社会科の特性に合わせた思考ツールを工夫することで、資料活用能力の育成にもつながる。

(3) 伝え合い考えを深める協同学習

互いの言葉を受け止め合い対話しながら集団や個人の考えを深める授業の実現のためには、協同学習の要素を学びの過程に取り入れることが有効な手立てであると考えた。

① 学習集団作り. 協同での学び方がどれだけ自覚され、身についてきたのかを調査するために協同学習の5つの要素に沿って、児童と共に協同学習のアンケートを作成する。アンケートに照らし合わせて、個人・グループとして、適切な活動ができたかを振り返ることで、児童は個人、学級全体の成長を目指し学び合う集団へ高まることが期待できる。アンケートは、同時に児童にとって目指すべきグループ学習の姿であり、協同学習のルーブリックともいえる。

② グループ活用の工夫. 一体感のもてるグループの人数や机の合わせ方や学習形態を工夫する。本実践では、4月当初は3人グループでスタートし、その後4人グループとした。全体で話し合う場面では、黒板の前に児童を集めることで、互いの言葉に集中できるようにする。また、個人を出発点とし、グループ内、クラス全体という2通りの集団を通ってきた意見が最



図1 キーワードカードの例

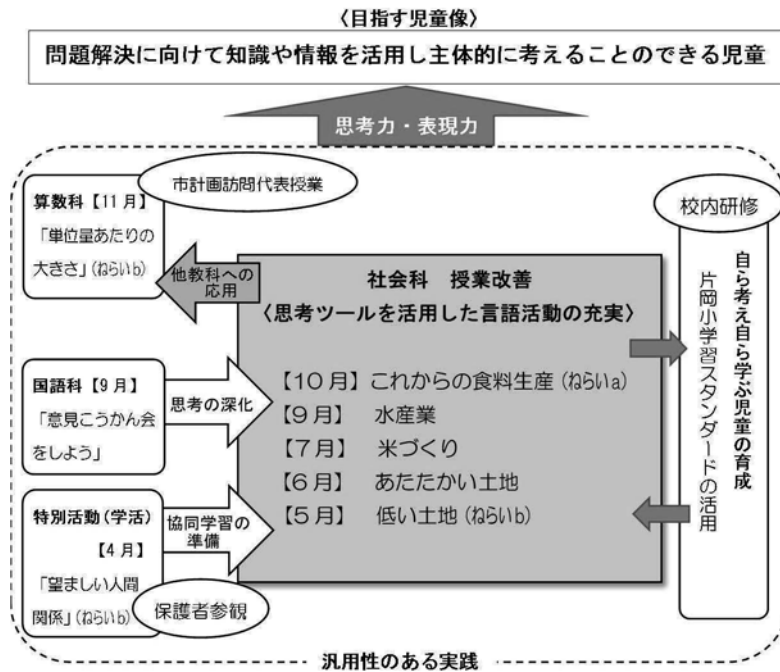


図3 研究の全体像（アクティブ・ラーニングに向けての実践）

後にまた個人に戻るという学習の流れとする。それにより一人一人が確かな学力の高まりを実感できるようにさせていく。

(4) 社会科を軸とした汎用性のある実践

① 他教科との関連。本実践では、小学校の特性を生かし、社会科を軸として、特別活動や国語科、算数科等と関連を図り言語活動を充実させていくこととする。思考ツール活用の工夫、協同での学び方、課題設定の工夫等を応用し、「知識や情報を活用して考える」学び方を児童に身に付けさせていく。

② 校内研修とのかかわり。平成28年度の校内研修主題は「確かな学力を身につけ、自ら考え自ら学ぶ児童の育成～算数科における基礎・基本の定着を図る指導を通して～」であり、算数科を軸として、児童の主体的な学習の実現を目指すこととなった。これは言語活動を充実させ、問題解決的な学習の授業改善を行う点で、本研究の手立てと重なる。10月のねらいa（社会科）、11月のねらいb（算数科）の授業検討会を校内研修と合わせて行うことにより、本研究と校内研修双方の充実を図る。

3 研究の仮説

身に付けさせたい知識を明確にしたうえで問題解決的な学習を設計する。問題解決の学習過程において、

思考ツールを活用することで、説明する、文章でまとめる等の言語活動を充実させる。それにより、習得した知識や情報を利用して比較・関連付け・総合しながら考え再構成する力を育成できるであろう。さらに、考えたことを表現する力の向上も期待できるであろう。

4 授業実践

本実践は、第一著者のH28の勤務校である高崎市立片岡小学校5年2組38名を対象として実施した。以下、10月の授業実践「これからの食料生産（小単元：全5時間）」の本時（ねらいa：5／5）について詳細を述べる。

本時は、小単元のまとめであり、同時に「わたしたちの生活と食料生産」の大単元のまとめとなる部分でもある。学習してきた内容を比較・関連付け・総合しながら考え再構成する学習として適切な場面であると考えた。

本時のパフォーマンス課題は「日本の食料生産をこれからどのように進めていったらよいか、調べてきたことをもとに、『食料生産いきいきプラン』を考え提案しよう」である。

本時の「キーワードカード」は、資料をカード化したものと、自分の考えを示す自分カードと2種類を準

表1 本時の単元計画

過程	時間	ねらい	思考ツール 言語活動
つかむ	1	資料から日本の食料生産を取り巻く問題について考え、学習問題をつくることができる。	「型」を使って考える
調べる	2	輸入が欠かせなくなった結果、国内の食料生産が低下し、食料自給率の低下を招いていることを理解することができる。	「付箋」を使って読み取る
	3	食の安全・安心に向けた行動について考えることができる。	
まとめる	4	これまでの学習をふり返り、日本の食料生産の問題について説明することができる。	「キーワードカード&まとめるシート」で説明活動
	5	日本の食料生産をこれからどのように進めていったらよいかについて、「食料生産いざいざプラン」を書くことができる。	

5 成果の検証

(1) 単元テストの記述問題の正答率

記述問題は、社会的事象について指定された2つ程度の語句を用いて文章での説明が求められている。表2を見ると正答率が高まり9月以降は9割以上になったことがわかる。また、5月に13%程度いた無回答の児童が、9月には0%になった。学級全体に社会的事象について説明する力が育成されてきたことを表している。

表2 単元テストの記述問題

月	5月	6月	7月	9月	10月
単元	低い土地	あたたかい土地	米づくり	水産業	食料生産
正答率	65.8%	57.9%	71.1%	92.1%	92.1%
誤答率	21.1%	34.2%	23.7%	7.9%	7.9%
無回答率	13.2%	7.9%	5.3%	0.0%	0.0%

備した。これまでの単元で獲得したキーワードを使って、それを3つの視点（国産の消費を増やすには／外国産に負けないためには／生産量を増やすには）のどこに置くべきかを、グループごとに根拠を説明するという言語活動を通して分類した（図4）。この説明活動の中で、児童は知識確認を行い、各キーワード間の関連性を確認し繋げていった。その後グループごとにカードを使って、その配置にした理由を発表し、再び個人に戻りグループで行った説明活動を個人で文章化し、最後にその文章を発表した。

(2) 高崎市実施「標準学力調査」の正答率（12月実施）

社会科では、基礎・基本的知識や技能の定着に関わる問題、活用力に関わる問題、ともに全国平均を上回った（表3）。特に課題であった資料から情報を読み取り、語句と関連付けて表現する文章記述の問題では、全国平均正答率を+30.4%と大幅に上回ることができた。さらに、無回答の児童はいなかった。

5月の実践で活用したカードとシート（図2）は、知識確認と情報の整理を目的としたものであった。10月の実践では、シート（図4）はYチャート型とし、KJ法を取り入れ児童がカードを根拠に自分の考えを表現するツールへと深化させた。グループで作成したシートも答えが1つではなくオープンエンドとなった。グループごとにその違いを説明することで、社会的事象を多面的多角的にとらえることができた。

表3 標準学力調査（社会科）

社会科	全国	K小
基礎・基本	73.8%	86.6%
活用	54.3%	62.4%
文章記述	37.2%	67.6%

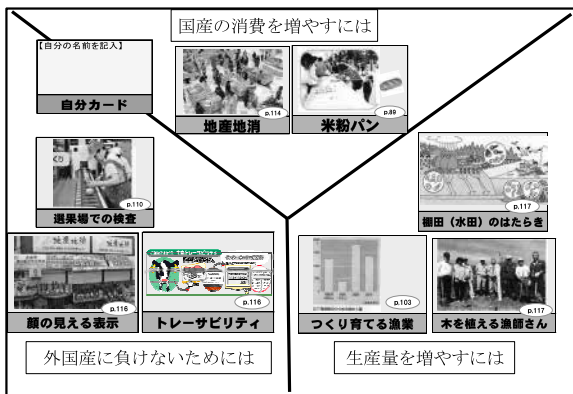


図4 Yチャート型まとめるシートの例（11月）

他教科へ転移をみるため、算数科の結果も全国平均と比較してみる。教科全体では+7.3%、式の意味を説明させる問題（記述1・2）においては+20%程度も上回った（表4）。社会科を軸とし、言語活動を充実させてきたことで他教科においても思考力、さらに表現力が向上したと考えられる。

表4 標準学力調査（算数科）

算数科	全国	K小
記述1	62.2%	81.1%
記述2	37.7%	54.1%
教科全体	71.3%	78.6%

(3) 単元末言語活動（パフォーマンス課題）

5月から10月の単元末パフォーマンス課題の評価において、C評価の児童が減少し続けた（表5）。5～6月の課題は、単元を通して学んできたキーワードを整理し、「日本の国土の特色」をまとめた。7～10月の課題は、「食料生産（米づくり、水産業、外国との関わりなど）」の問題点についても考え、キーワードを自分の考えの根拠として、「まとめる」「提案する」という難易度の高いものである。課題のレベルを徐々に上げていったにも関わらず、C評価の児童が0%になった。

表5 単元末パフォーマンス課題の評価

月	5月	6月	7月	9月	10月
単元	低い土地	あたたかい土地	米づくり	水産業	食料生産
A	18.4%	39.5%	13.2%	21.1%	23.7%
B	68.4%	47.4%	73.7%	76.3%	76.3%
C	13.2%	13.2%	13.2%	2.6%	0.0%

(4) 協同での学び方に関するアンケート

学習集団づくり（(3) ①）で述べたアンケート調査の結果である。どの項目に関してもC評価「できていない」と感じている児童が減少し、A評価「できる」と感じている児童が増加している（表6）。

表6 協同での学び方に関するアンケート

	アンケートの要素	7月	10月	11月
ア	互恵的な協力関係	0%	34%	37%
		16%	5%	0%
イ	グループと個人の責任	11%	24%	21%
		18%	3%	0%
ウ	活発な相互交流	5%	26%	26%
		11%	5%	5%
エ	対人技能 小集団技能	5%	26%	26%
		29%	8%	0%

上段（A評価） 下段（B評価）

5つ目の要素「集団改善手続き」においては、自由記述で振り返りを行った。11月のアンケートでは、「自分と違う意見も取り入れて、もっとわかりやすい説明がしたい」「友達を助けてあげるような言葉がけをしたい」など（16名）、グループ活動のさらなる向上を目指す内容も多くみられた。協力して学習することの意義や方法が児童の中に根付いたと考えられる。

6 考察

(1) 社会科における言語活動充実の成果

教科特性や問題解決的な学習過程に応じた思考ツールの活用、思考を深めるための協同学習などの手立てにより、児童は協同で課題解決することの価値に気づき、情報を比較・関連付け・総合する「考え方」を身に付けることができた。その結果、知識や情報を根拠として自分の考えを再構成し、説明する力が向上したと考える。情報を整理することが苦手な児童も、情報をどのように関連付けたらよいかのわかることで、学習課題への取り組みや話し合いへの参加も主体的となり、学習の成果も上がった。

(2) 汎用性のある実践の成果

社会科を軸に進めてきた実践の締めくくりとして、算数科（11月）で汎用性を試みた。算数科においても児童は、問題解決的な学習の流れ（「片岡小学習スタンダード」）を意識して授業に臨み、問題を解くことだけにとどまらず、その解き方を、既習事項等を根拠として他の児童に説明することができた。思考ツールを使って協同で言語活動に取り組んできたことは、児童の思考力・判断力・表現力を育成し、他教科においても児童が自分の考えを広げ深めるための力となったといえる。このことは、今後のアクティブ・ラーニング実現に向けた一歩になったと考える。

(3) 校内研修とのかかわり

本実践を校内研修の提案授業として位置づけて行ったことは、児童の主体的な学びの実現への授業改善を促進し、本研究が勤務校の課題解決に大きな役割を果たしたと考える。

主要参考文献

福岡敏行（2002）コンセプトマップ活用ガイド—マップでわかる！子どもの学びと教師のサポート— 東洋館出版社
 市川伸一（2014）学力と学習支援の心理学 放送大学教育振興会
 ジョンソン、D.W.・ジョンソン、R.T.・ホルベック、E.J. 著 石田裕久・梅原巳代子 訳（2010）. 学習の輪 —学び合いの協同教育入門— 二瓶社
 北俊夫・向山行雄（2016）アクティブ・ラーニングでつくる新しい社会科授業 ニュー学習活動・全単元一覧 学芸みらい社
 関西大学初等部（2012）. 関大初等部式思考力育成法 さくら社

- 小松信哉(2016) アクティブ・ラーニングでつくる算数の授業
東洋館出版社
- 文部科学省(2008) 小学校学習指導要領解説 社会編 東洋館
出版社
- 村田辰明(2013) 授業のUDBooks社会科授業のユニバーサルデ
ザイン 全員で楽しく社会的見方・考え方を身に付ける!
東洋館出版社
- 錦織圭之介(2015) 筑波発 問題解決の算数授業-変わる自分
をたのしむ算数授業づくりへの転換- 東洋館出版社
- 澤井陽介(2013) 小学校社会 授業を変える5つのフォーカ
ス-「よりより社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を
培うために- 図書文化
- 澤井陽介(2016) 小学校 子どもの思考をアクティブにする社
会科の授業展開 東洋館出版社
- 佐藤浩一 編著 (2013) 学習の支援と教育評価-理論と実践の
協同- 北大路書房
- 杉江修治 (2011) 協同学習入門-基本の理解と51の工夫-
ナカニシヤ出版
- 田村学(2015) 授業を磨く 東洋館出版社
- 田村学・黒上晴夫(2013) 考えるってこういうことか! 「思考
ツール」の授業 小学館
- 田中耕治(2010) よくわかる教育評価(第2版) ミネルヴァ書
房
- (本稿は、第一著者によるH28年度群馬大学教職大学
院の課題研究論文の一部を抜粋し、加筆修正したもの
である。)

(よしの あきこ・やまぐち あきひろ・いしかわ かつひろ)